

春永話

折口信夫

青空文庫

むら／＼と見えて たなびく顔見世の幟のほどを 過ぎて来にけり

昭和十年三月、私の作る所である。歌は誇るに値せぬが、之に關聯して私ひとり思ひ出の
禁じ難いものがある。京の顔見世は、近年十二月行ふことになつてゐる。十一月末にさし
迫つて初める為、十二月興行と謂つた形をとることになつてしまつた。此は全く、明治中
頃からの新しい為来りに過ぎない。明治の末、大正の初年頃、京の顔見世と言へば、大阪
からも見に行く風がはやり出した。ある年の顔見世に、口上の幕がついて鴈治郎が正座に
すわつた。……「京の御見物様。毎度よんで頂きましてあり難い為合せに存じます。では
御座りますが、ならうことなら、顔見世たつた一度でなく、ほかの時にもよんで頂けます
やうお願ひ申し上げます。」まあかう言ふ言ひまはしであつた。そんな事にかけてはちつ
とも神経を動かさぬ京の見物はおもしろさうに「えへら、えへら」笑うてゐた。京のつま
しい生活を衝いてゐる、極めて無遠慮な、後味のわるい口上だが、言ふ役者も役者なら、
聴いてゐて、「うまいことぬかしよる」と、何でもない顔をしてゐる見物も与し易い群衆
であつた。外へ出ると暗い河原に鳴く千鳥、堰塞を溢れる水の音、其さへ、記憶といふ程
には残つてゐない。其後東京へ移つて、稍久しくなつた頃、——南座の三浦介の舞台でた

ふれた。——さう東京へは聞えて来た——役者の上を特に想望しての歌としては、動機が、大分薄いやうな気がする。芝居へ連れて行かれて、自分も迷惑せず、人をも困らさなくなつた頃はもう鴈治郎・我当——後、仁左衛門——対立して人気を争うてゐる時期であつた。どうして覚えてゐるのか知らんが、角か弁天座の豎看板に、我当の兄我童の、仁左衛門襲名の披露狂言大和橋の絵組みがあつて、此に向つて、片手をひろげ片手を地面について、驚いた恰好の馬方の袖に右団治——後、齋入——の紋の松かは菱に蔦の葉がついてゐた。此右団治が役変替を言ひ出したことから、我童狂死、我童びいきの東京の車屋が下阪して、右団治をつけねらつて居ると言つた様な噂まで耳に残つて居る。どこまでが記憶で、何処からが知識のつけ足しやら、今日になつては、甚心もとない。其より少し前、鴈治郎弄花事件と言ふやうな警察事故が起つて、縫物屋通ひの娘たちを驚倒させた。角の芝居と朝日座との間に後、石川呉服店となつた同じ家で、役者の写真を売つて居た。蔀戸をあげ、障子囲ひにした店床を卸した落ちついた家で、手札型の台紙にはつた舞台姿や、豆写真を張りつけた糸巻などが、その商品であつた。町々の縫物子が、其を買うては、護り魂のやうに秘めて居たものである。さう言ふ鴈治郎びいきの娘たちが、どんなにかたみ狭く案じ暮したことだらうと思ふと、昔のあほらしい程ののどかさに笑ひがこみあげて来る。

誰の芝居よりも、右団治一座の狂言によくなじんで居た。此人は、鴈治郎と一座する事が
少く、我当を書き出しに、座頭を勤めたことが続いて後、きつぱり座頭渡しの式をして、
我当を押し出した。此は折り目正しい為方だと、今から見れば、そんな何でもない事に感
心した世の中だつた。齋入右団治が、そんなさばけたとりしまりをしたのも、原因があつ
た。老齡に向つて、彼の嗜んだ「茶」が、ものを言ひ出した所もあつた。書き物の「石川
五右衛門」で、茶の宗匠になつてゐる隠れがの五右衛門を見たが、彼の得意だつた葛籠抜
けや、釜煎りの五右衛門よりは、性根をよく表現して、こんな名人が世にあらうかと思は
せた。少年期を出たばかりの鑑識を、今更保持する自信も薄くなつたが、ともかくよい役
者であつた。高安の老先生が芝居ずきであつた事は聞いてゐたが、近年月郊——老先生の
長男——さんの「高安の里？」を読んだら、齋入を認めないやうにとれる文章があつて、
私の記憶の為に悲観した。齋入は下品な顔の男であつたと言ふやうに書いてあつたので驚
いた。月郊さんは、齋入の顔を一まはり大きくした時蔵——後歌六——と、記憶をふり替
へて居られるのではないかと思つた事である。東京でもさうだが、上方でもはつきり、座
頭と脇役者とは格が違ひ、育ちの違ふことを思はせて居た。時蔵は朝日座あたりでは、
座頭格に居て、芸も技巧的でおもしろかつたが、中芝居、角芝居の座頭の勤まる柄ではな

かつた。寧、勤めなかつたから、その柄が出来てゐなかつたといふ方が當つてゐる。璃珽などでも今では、喜多村氏などが、神様見たいに言ふが、——さう言つて、あの不幸な達人を伝へてやつてくれることはあり難いが、——やはり浜芝居の座頭か、書き出しで、長い腕を磨いて来たので、大芝居の座頭の相談役には此以上の人はないが、芸格は低かつたと思ふ。時蔵と似た輪廓だが、長い座頭の経験が、齋入の顔に、芝居の長者らしい品格を置いてゐた。まことに大阪の芝居錦絵——その物は、美しさの眞の準拠とはならぬが——をそのまゝの顔姿であつた。だから大阪の錦絵の持つよき——と言ふより醜さ——が、そのまゝ彼の舞台姿に出てゐた。月郊さんは、芝居擁護者としての伝統に列つた人だが、あの一人だけだけは、どうも東京歌舞妓のよさが、喰ひこんで来て居る。あの人の作や評には、凡心服してゐるが、齋入の容貌評については甘心する事が出来ない。六郎先生などに聞いて、高安家の正しい判断を知りたいと思つてゐる。

我童は、前に姉を失つてゐる。此人も、井戸か何かに這入つて死んでゐる。そこへ、先々代家橘——先代羽左衛門父——を失つた東京劇壇では、彼の上に其幻影を感じて、其身替りに据ゑかけてゐた我童が、姉と同じ病気になつた。その第十一代目仁左衛門の氣随気まゝ、

と思はれた生活も、一つは思ひつめない為、随時発散を心がけての気まぐれだったことを思ふと、其一生に理会がつく。我当は大阪の低い知識の導くまゝに、大和桜井から一里も奥の城島^{シキシマ}村まで行つて、「忍阪内ノ陵」——舒明天皇陵——に参つて家兄の平癒を祈つてゐる。だから、私にとつては、仁左衛門について書く方が、当らずとも遠くない見当には這入るのである。毎日新聞と朝日新聞とが、大阪中の家庭を両分して、ひいき争ひをくり返させて居た時代である。鷹治郎・仁左衛門なども、其安易な白石・黒石に立てられたゞけである。ただだと言へば、其までゝあるが、我々大阪で若い時を過した者にとつては、ただだではすまないものがある。

日清戦争当時、何を見て過したか、殆、払拭せられた碁盤の面のやうに記憶の痕もなくなつてゐる。ところが唯一つ、花道から走つて出た若い将校の身边で、幾つかの煙硝火が発火する。今から思へば、舞台に幾筋かの糸が張つてあつて、其を伝つて火が走つて来る為掛けだつたのだらう。其将校、剣をあげて、「突貫」と言つたらしい。其瞬間、しゅつと来た火が、その額のあたりで炸裂する。「やられた」と言つたか、まさか、此時分「万歳」とは言つて落ち入らなかつたと思ふ。立ち身のまゝで幕になるきづかひはないのだが、私

の記憶は、其でできてゐる。此が松崎大尉であつて、土地は牙山城外である。演ずる所の優人は、中村鴈治郎であつた。数へて見ると、此が私の八歳の時である。此位にしか覚えてゐないのが、寧ろ、当りまへであらう。此前にも、芝居へは連れて行つてくれてゐるやうに、家人は言つて居たが、何分にも、此外には古い舞台の印象がない。性格としては、仁左衛門の方が、私などには向いてゐる。その舞台も事実、早期において深くなじみを感じてゐる。にも繫らず、壮年の後、鴈治郎の芸に、心をひかれることの多かつたのは、何によるのだらう。考へればいろ／＼縁由らしいものはある。だが何としても、芝居最初の遭遇に見たと言ふことが、さうしたすべての上に、圧するほどの力を持つてゐるのだと思ふ。おもしろをかしくもない戦争芝居、其に後年、此舞台などが導きになつて、身だけに合はぬ新しい着物を着たがるやうになつた役者、此が私の最初の印象だとすれば、私の劇に対する理會なども、凡、思ひ見ることが出来る。だが其も此もどうなるものであらう。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻10 芝居」作品社

1991（平成3）年12月25日第1刷発行

1997（平成9）年5月20日第4刷発行

底本の親本：「折口信夫全集 第一八巻」中央公論社

1967（昭和42）年4月発行

入力：門田裕志

校正：多羅尾伴内

2003年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春永話

折口信夫

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>